

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

忘れてはならぬこと

1954（昭和29）年というからもう63年前のことだ。12月29日のこと、前穂を目指して岳沢をのぼっていた松本県ヶ丘高校の山岳部の生徒を雪崩が襲い、2名の尊い命が犠牲になった。

この雪崩事故を契機に、二度とこのような悲惨な事故をおこしてはならないと、翌1955（昭和30）年、中信校長会長が山岳遭難防止のための安全教育を推進する委員会の設立を提唱した。これにより、中信地区には「中信高校安全教育研究会」（現在は「中信地区安全登山研究会」と呼びならわされている）が立ち上がり、毎年夏と冬の2回中信地区の山岳部の活動と、学校登山についての計画を持ち寄っての情報交換会が行われている。計画の審査をするというような権限を持った会議ではない。当初からこの形であったかは不明だが、しかし、自校の登山計画を第三者の目で見てもらうだけでも大きな意味があると考えている。この研究会の事務局は一貫して大町高校または大町北高校におかれてきた。事務局が固定していることで、60年にもわたってこの研究会は続いてきたのだと思う。したがって昨年からは両校を受け継いだ岳陽高校を事務局とし、校長を会長に小生が事務局長となって会を開催した。ちなみに今年は、7月11日火曜日に行く。

その後、長野県の高校の登山では僕の承知している限り、3件の山岳遭難死亡事故が起こっている。1967（昭和42）年西穂高岳では、集団登山をしていた松本深志高校の2年生11名がなくなった。このことはこれまでも何度か書いたが、松本深志高校は我が家から徒歩2分、身近な場所での事故は小学校3年生だった私の心にも深く残っている。その事故から今年で50年になる。深志高校の南西の一角にはこの事故を祈念するモニュメントがあり、今に伝えている。学校集団登山の中での事故だった。Iさん、Oさん、Sさんなどこの事故の学年の先輩たちとも親しくお付き合いいただいているが、彼らもすでに70に近い。高校時代のわが師、故小林俊樹氏は晩年まで深志高校の山岳部の生徒とともに事故の起こった8月1日には西穂への巡礼を欠くことがなかったが、山岳史上に残るこの事故のことは、語り継いで行かねばならぬ重い事故である。深志の山岳部には、これからもこの事故の語り部として、毎年の西穂登山を続けてほしいと思う。

1983（昭和58）年6月3日の事故は、今は廃道になっている前常念岳のトラバース道で起こった。高体連の県大会が常念で行われたが、その閉会式後のことだった。豊科高校のS君が雪の残る道でスリップして一の沢の最後の水場まで滑落して、命を落とすというものだった。教員になってまだ2年目の僕は定時制勤務で高体連登山部には関わっていなかったが、常念は大学時代にバイトをしていたこともあり、多い年には年間100日は入っていた馴染みの場所。場所も状況もわかっているのに、強い衝撃を受けた。すでに「高校現場でこの事故の当時大会に関わっていた先生方はすべて退職されてしまった（と思う）。そして、事故の時に様々な面でご尽力いただいた常念小屋の社長（気策なその人柄から親方とよばれていた）山田恒男さんもつい先日鬼籍に入られた。時代は流れた。

そして3件目は1989（平成元）年3月18日、長野県山岳総合センターの高校山岳部生徒顧問対象の冬の野外生活体験会で起こった。五竜とおみスキー場上部の遠見尾根で、輪

かんじきの歩行訓練をしていた斜面で発生した雪崩に5名が巻き込まれた。4名は救出されたものの、次年度から山岳部顧問になる予定であった松本蟻ヶ崎高校の酒井耕教諭が亡くなった。

深志高校の事故は学校登山の下での事故ということで、やや趣は違う。かつて長野県の多くの学校で行われていた学校登山にも少なからず影響を及ぼしたのか、50年を経た現在、県内で学校登山を行っている高校はかなり減っている。大町岳陽高校も含め、数校で行われているが、時代の流れの中で安全への配慮はより気を配って行わねばならない状況にある。

高体連の大会（厳密には大会後）に起こったS君の死亡事故については、その後の高体連登山部の在り方に少なからず影響していると思われる。それ以前は6月の県大会は北アルプスの2500mを超える雪上が当たり前であったが、そこに一定の縛りがかかった。雪上となれば、たとえ6月であってもなにがしかの経験や技術が要求される。高体連の大会は高校登山のスタンダードを基準にした大会である以上、そのスタンダードレベルいいかえれば目標が「（原則）雪上にはのらない」となれば勢いダウンせざるを得ない。そうすれば生徒に買わせる装備一つとっても変わってくる。以前は山岳部の生徒と言え、夏も冬も兼用できる革の重登山靴が定番であったが、今は用途によって靴も履き分ける時代、金銭的に恵まれていない高校生に、顧問として最初に関わる靴が登山の質も規制することになる。ライトな冬や残雪期にも履ける靴を買わせるか、夏山のみの靴を買わせるかで、活動内容がかわってきてしまう。この事故以後、レベルダウンの速度は予想する以上に速い。

ちょうどそのころ長野県山岳協会は、中国登山協会との間で、「日中合同登山技術研修会（日中合登研）」計画が開始（1980年に第1次）され、第1次隊に参加した勝野順氏と宮本義彦氏が参加した。その勝野氏らが中心になって、1981年県内高校山岳部顧問に声を掛け、高体連とリンクしつつも独立した社会人の山岳会として信濃高等学校教職員山岳会（信高山岳会）を立ち上げた。信高山岳会は発足直後から長野県山岳協会に加盟していたが、この「日中合登研」計画の推進の中で、84年までに松田大、飯沼健樹、高橋清、杉山昭久、小林國弘各氏が相次いで訪中し、顧問の力量も上がった。そんな矢先の県大会の事故であったが、技術力の高まった顧問の力を次に伝えることや、同時に日中合登研の延長から生まれてきた「高校生を中国の山へ連れていきたい」といういわゆる「長野県高校生訪中登山交流会」のための技術力のアップのために1988年から長野県山岳総合センターに計画されたのが、「冬の野外生活体験研修会」であった。しかし、この研修会では、初年度顧問として参加していた高橋氏が滑落するという事故が起こってしまった。命に別状はなかったのは幸いであった。そして、その翌年、酒井先生が亡くなるという痛ましい事故が起こってしまったのである。2年続けての事故はその後の研修会の在り方に問題を残し、残念ながらこれ以後、3月の研修会というのは長野県においては復活しなかった。歴史にもしはあり得ないが、きちんと総括をし、安全対策を講じたうえでどんな形にせよ、この研修会が、この後も引き続き行われていたならば、と考えると忸怩たる思いを持たざるを得ない。28年前の事故は、今回の栃木の事故と類似している点も多いが、その後の長野県の山岳部の技術レベルの低下はここが一つの大きな分岐点だった。高校現場においてこれらのことを知っている関係者が次第に減っていくのは時代の流れだが、忘れてはならぬこと、語り継いでいかねばならぬことである。